四国新聞　2020年(令和2年)11月22日(日曜日)

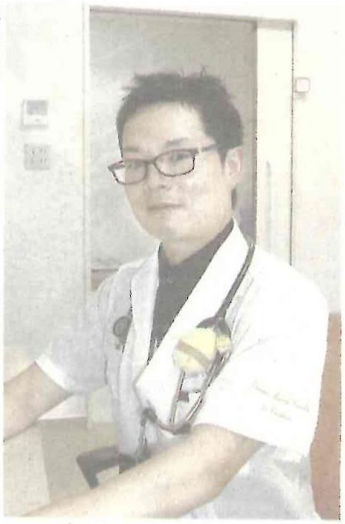
香川の医療最前線 619

四国こどもとおとなの医療センター
小児血液・腫瘍内科

小児白血病

将来を見据えた治療を

各科の迅速な連携課題



永井功造氏

小児がんの中で最も発生頻度が高い小児白血病。療法が進歩した上、小児は大人と比べて治療の効果が得やすいため、生存率は比較的高い。ただ、治療による副作用でその後の人生に大きな影響を及ぼすケースもあるため、先を見据えた対応が求められる。四国こどもとおとなの医療センター小児血液・腫瘍内科の永井功造医長に治療法や課題などについて聞いた。

―小児白血病について詳しく。

15歳以下の子どもが発症する白血病を指す。施設によっては19歳以下を小児科で治療するところもある。小児10万人当たり4人程度が発症するといわれており、小児がんのうち約40%を占める。小児白血病の中で最も発症率が高いのが急性リンパ性白血病、次いで急性骨髄性白血病。急性リンパ性白血病の5年無病（がんが再発しない）生存率は約80%、急性骨髄性白血病は約60%だ。

―どんな症状があるか。

発症すると正常な造血が妨げられて免疫が低下したり、白血病細胞が臓器で増殖したりする。これにより、貧血や骨痛、発熱、肝臓や脾臓の腫れなどが起こる。特徴的な症状がなく、他の病気との区別が難しいため、血液・骨髄検査をしなければ病気の存在が分からない。白血病の種類や性質を調べるため、レーザー光を当てて細胞を分析する「フローサイトメトリー」や遺伝子・染色体検査などが行われる。

―治療法は。

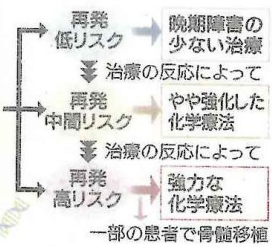
複数の抗がん剤を組み合わせた化学療法や骨髄移植、感染症や化学療法の副作用に対する支持療法が主な治療法。白血病の性質や化学療法の効果も注視しながらそれぞれの患者にとって最適な治療を施す必要があり、治りやすい場合は晩期障害の少ない治療、そうでない場合は骨髄移植を含めた強力な治療によって治癒を目指す。これを治療層別化と呼び、新規治療薬の開発に並んで重要な治療戦略の一つだ。

―治療の副作用を考慮し、長期的な視点を持って患者の治癒に向けて取り組む必要があると。

これまでは治すことに専念した治療が主流だった。だが、治癒した患者が成人になると治療によって不妊や心不全、内分泌障害などの副作用がでる晩期合併症が理由で、就学や就職、結婚、出産といったライフイベントを迎えた際、さまざまな問題に直面するという状況が浮かび上がってきた。現在は、例えば心筋毒性や不妊症を起こす可能性のある薬剤の使用量を抑えるなど、合併症のリスクを踏まえた治療スケジュールが組まれるようになった。治療を終えた後も、患者の状態に合わせた長期の定期的な診察が必要だ。

―今後の課題は。

不妊症治療の進歩に伴って、医療者の中で思春期や若年成人が骨髄移植を受けることで、不妊症リスクが高まる患者の妊孕性を温存すべきという意識が高まっており、その対応が取れる施設も増加している。妊孕性温存のほか、病気の告知から生殖医療を受ける必要性を説明するときの心理的配慮、時間的な猶予がない中で治療するための科をまたいだ迅速な連携も欠かせず、改善すべき点が多いのが現状だ。



治療層別化について（急性リンパ性白血病の場合）

■ 四国こどもとおとなの医療センター
小児血液・腫瘍内科

急性白血病、脳腫瘍、神経芽腫を中心とした小児悪性腫瘍の治療に各科と協力して取り組んでいる。

所在地：善通寺市仙遊町2―1―1
電　話：0877（62）1000
https://shikoku-mc.hosp.go.jp/section/c_hematology.html

■ながい・こうぞう　2003年愛媛大医学部卒。米国のジョンズホプキンス大小児腫瘍部門留学、愛媛大小児科講師などを経て20年1月から現職。小児科指導医、血液学会指導医、がん薬物療法指導医、小児血液がん専門医、医学博士。愛媛県出身。43歳。